

渡来の三重構造導き出す

日本人の成り立ちを、遺伝子の分析から知る事ができる。古いDNAを取り出す技術や、全遺伝情報を調べる技術が普及したため、飛躍的に情報量が増えた。これまででは見えなかった姿が明らかになってきている。
(吉田薫)



■二重構造

日本人の成り立ちについては、これまで、先に住んでいた縄文人と、後から農耕技術を持って大陸から渡ってきた弥生人という「二重構造説」が唱えら

日本人の起源

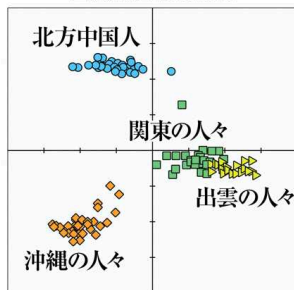


東北地方を旅する「アイヌ語起源の地名が多いに気付く」。もともと東北は、縄文人の遺伝子を濃く受け継ぐとみられるアイヌの人々の地だ。齋藤成也さんによれば、アイヌが北に追われ、空白となった東北地方にやってきた人たちが「エミシ」。二回目

エミシの謎 うまく説明

の渡来人の子孫だとみる。大和朝廷は7世紀ごろから盛んにエミシと戦った。アイヌと異なっているけれど、畿内の政権とも対立したエミシって何だろう。二段階渡来説は、エミシについての長年の疑問も説明できそうに思われる。

各地の人々のDNAを主成分分析した結果



齋藤成也氏らの研究グループによる

れてきた。

国立遺伝学研究所の齋藤成也教授「写真」は、多くの分析を通じて、二重構造の間にもう一段階の渡来を加えた三重構造を導き出した。



縄文人の遺伝子や、沖縄やアイヌの人々、さらに中国人、韓国人などのデータも集めた。日本各地の居住者を分析する過程で発見があった。島根県の出雲地方出身者二十一人の全遺伝情報から、関東の人とは微妙に異なるという結果を得た。もちろん、関東の人も出雲の人、沖縄の人や中国人とはかなり離れている。そして関東の人の方が、やや中国人に近かったのだ。

この研究では、全遺伝情報中、数十万カ所ある「塩基多型(SNP)」といわれるものを調べ、とてもたくさんなので、主成分分析などの統計手法で処理する。点が近いことは遺伝的に近いことを示す。

■中心軸

別の研究によると、鹿児島県の薩摩半島南部の人々の遺伝子も、出雲と同様。関東の人々とは異なる傾向があった。

■渡来元は

二回目の渡来元ははっきりしない。二回目・三回目の人々は、遺伝的にそなを連ねない。ただ二回目は、長江流域のような南方系の要素が強く、おそらく漁業にだけ、簡単な農業を知った人たちでしょう。私は『海の民』と名付けています」と齋藤さん。

研究はなお続いている。中国や韓国と協力して各地の古代の遺伝子や現代人の遺伝子进行分析する。言語学や考古学の専門家とも共同で、全体像を明らかにしたいという。

また三回目の渡来は現在も進行中だ。日本の国際結婚の相手は中国人、韓国人が半数を占める。東アジアでの遺伝子の交流は、今も続いているのだ。

また理化学研究所が、沖縄の人々と、近畿・九州・東北の人々との遺伝関係を調べたところ、最も近いのは九州。次は近畿ではなくて東北だった。関東や近畿の人は、それ以外の地域の人と、やや異なっている。これをどうみるか。「縄文時代の後半、または弥生時代との境目あたりで、二回目の渡来があったのだと考えています。今から三千〜四千年前くらいになるでしょうか。その人たちは縄文人と混血しながら、日本中に広がった」と齋藤さんは話す。そして三回目の渡来があった。「大和朝廷をつくった人たちを含まない集団が渡来し、主に北九州から近畿、関東までの地域に住み着いた。こう考えると、日本の中心軸というべき地域と、それ以外のところで、違いがみられることを説明できるのです」